

群 教 セ	C02 - 01
	平16.221集

戦後の玉村小学校における 教育に対する価値観の移り変わりについて

—— 通知票の設廃を通して ——

特別研究員 吉田 知宏 (玉村町立中央小学校)

《研究の概要》

本研究は、通知票の設廃理由を通して、玉村小学校における教育に対する価値観の移り変わりについて調べようとしたものである。通知票が19年間発行されていなかったことは、玉村町の人にとって大きな出来事であり、多くの人が記憶している。そこで合科教育で有名な玉村小が、戦後どのような教育を実践したのか、それを保護者がどのように評価していたのかを、通知票の設廃理由を中心にまとめたものである。

【キーワード：教育史 通知票 玉村町 小学校】

主題設定の理由

平成10年に学習指導要領が改訂され、平成14年度からは完全学校週5日制が実施された。それに伴い学校の状況が急速に変化してきた。地域との密接な関係を築くため、保護者や地域の意見を参考にした学校評価が始まり、学校の様子をよく知ってもらおうと授業参観だけでなく、学校開放日が設けられるようになってきた。教科指導においては、少人数指導がほとんどの学校で行われている。このように、学校教育の充実を目指して、教育現場が急変し始めている。その中で評価についても見直され、評価の方法そのものに大きな変化をもたらされた。

今まで指導要録に記載されていた相対評価による評定から、目標に準拠した評価に改められた。それに伴い通知表についても、観点別の評価に改訂する学校が増えてきた。通知表は家庭への通信であり、保護者や本人に学校での実態を知らせ、今後の生活や学業への取組について教師と共に考え、改善していくものであると、私は思う。しかし観点別の評価は、一人ひとりにどんな力が身に付いているのかをつかむための評価であり、教師にとっては指導上、役立つことが多いが、保護者にとっては、家庭でどの単元をどのように学習させればその力が身に付くのか、分かりにくい面がある。また今までの単元別の通知表については、単元ごとのできる、できないについてはよく伝わるが、どんな力が不足しているかについては伝わりにくい。どちらにしても、子どもの姿を家庭に知らせるには課題があると考えられる。

そこで県内の学校の通知票のあり方について調査した結果、玉村小学校ではすでに、昭和20年代から通知票について議論されていることが分かった。玉村小学校といえば、昭和初期に行われていた合科教育が有名である。その玉村小学校で昭和28年に、最初の大きな通知票の改訂が行われている。その後、昭和34年に廃止、そして昭和53年に復活と、通知票について何回もそのあり方が議論されてきた学校である。戦後の玉村小学校の教育について、通知票の設廃の原因から調べれば、どのような教育実践が行われていたのか、通知票が本当に必要なのか、また教師や保護者にとっての通知票の役割は何なのか明らかにできると考え、本主題を設定した。

校の中には、通信簿は出欠や身体状況だけで、学習内容については学級通信で知らせるようになっていった。

2 戦後の玉村小学校の教育

玉村小では大正末期から昭和初期、宮川静一郎を中心に行われた合科教育が有名である。この時代、一斉授業が一般的であったが、読み方の教科書を用いるのではなく、子どもの生活に密着した題材を使い、自ら課題を解決していくという子ども主体の教育を展開した。子どもの個性を重視した考えに共感し、玉村小の職員集団が自発的に、熱心に合科教育に取り組むようになった。そして職員が一丸となって子ども中心の教育を行う精神は、この時代に培われ、玉村小学校の教育は宮川氏が玉村小学校を去った後も、脈々と受け継がれていく。戦争中も戦後も、個性重視の教育が続けられていたことが玉村小学校百八年史からも分かる。

戦後は、戦前から玉村小で指導をしている先生が数名残っていたため、昭和初期から続く授業研究が、昭和50年頃まで熱心に続けられていた。昭和30年後半の職員会議録を見ると、授業研究会が1年間に数十回行われていた。その様子をB先生(昭和37~43勤務)は「赴任した当時(昭和37年)、7回も授業を見てもらった。また子ども自身が学級通信なのだから、家に帰ったら学校での成果が分かるように毎時間しっかり指導しなければならないという雰囲気だった。」またC先生(昭和40~51年勤務)は、「当時の玉小の先生方は教育に燃えていた。例えば国語では、どんな文学作品を扱うか自ら決め、それについての指導計画も授業研究をしながら自分たちで作っていた。授業については本当に細かいところまで話し合い、子どもたちの輝く目を作るために自らの腕を上げようとがんばった。」と話してくれた。特に通知票がなかった19年間は、「子どもたちの輝く目を作る」「子ども自身が学級通信だ」という言葉に表れているように、学校が責任をもって学力や生活力を保障しようとしていたように感じる。当時の校長先生の言葉に「通信簿がないということは、教師にとって大へんな事である。日常的に子どもの動きと変化に心を配らねばならないし、一人ひとりの記録も必要になる。『通信簿がないので子どもが勉強しなくなった』という非難が少しでも出ないためには、授業を充実させ、子どもの学習活動をいよいよ活発にしなければならぬ。」(創立百二十周年記念誌より)とある。子どもたちの輝く目を作るため、自分たちの授業の腕を上げようと必死に努力した時代であった。

大正から昭和へと時代は流れても、子どもにあった教材を使い、職員が一丸となって教育に取り組む玉村小学校の教育は、宮川氏の時代からずっと子ども主体で進められてきた。

3 玉村小学校における通信簿の改訂から廃止まで

(1) 昭和28年度に通信簿が改訂される

昭和27年までの玉村小の通信簿は、資料2のようなものであった。評価の仕方は、学習面が相対評価でA~Cの3段階、行動面はA~Eの5段階で行われていた。改訂当時のことを、玉村小に勤めていたA先生(昭和22~40勤務)は、次のように話してくれた。

どんなに努力してもA(約20%)をつけてあげることができない子どもがいるという声が職員の中で上がっていた。またこのころになると戦争での傷跡も消え、世の中の生活も安定してきた。すると子どもに目を向ける保護者が多くなり、成績を気にするようになってきたように思う。中には、通信簿の評価で一喜一憂したり、何かを買ってあげたりする行為が見られ始め、通信簿の成績が悪い子や家庭の事情で買ってもらえない子はかわいそうだった。

また、その話を裏付けるように、相対評価でつけた成績が、多くの子どもを苦しめているという意見が職員会議録(資料3)に残されていた。このように、保護者が通信簿の成績で子どもを評価することから子どもを守るため、昭和28年、玉村小も他地域と同様に通信簿の改訂を始めた。

資料2 昭和27年度通知票

学習面		学習の状況			学期
		一学期	二学期	三学期	
国語	聞く	B			一学期
	話す	B			
	読む	A			
社会	書く	B			二学期
	作る	C			
	理解	B			
算数	理解	C			三学期
	態度	B			
	技能	B			
理科	理解	A			三
	態度	A			
	能力	A			
音	理解				
	態度				
	能力				

(2) 昭和 28 年度の通信簿

前年度までの通信簿と大きく変わったところは、特に学習面である(資料 4)。相対評価をやめ、個人の努力の度合いを評価する形をとった。また名称が通知票から学校通信に改められ、行動面については、具体的な項目に印を付け、同時に言葉による評価も行われていた。

この通信簿に改訂したとき、玉村小では保護者にアンケートをしている。結果は「今年の方がよい」と答えている家庭が、学習面、行動面ともに圧倒的に多い。しかし学習面については回収数 312 に対し、89 家庭(約 30%)が「去年の方がよい」と回答している。アンケート結果に寄せられた、賛成反対それぞれの意見は、資料 5 のようなものであった。

(3) 通信簿廃止へ

さらに A 先生は、昭和 30 年代のことを、「このころになると今度は、『努力しました』の数で成績を比較する保護者が現れ、成績を以前のように気にする子どもが増えてきた。」と話してくれた。職員会議録にも、昭和 30 年 7 月には再び通信簿のあり方が話し合われた記録が残っている。職員会議録(資料 6)を読むと、評価の方法や通信簿の必要性を話し合ったことが分かる。

また職員会議で通信簿のことを取り上げている間に、玉村町に大きな変化が起こった。昭和 33 年に滝川村との町村合併が行われ、板井、宇貫、下郷から大勢の子どもが玉村小に転入してきたのだ。昭和 32 年と比較すると、学校の児童数は、108 人増となり、クラスも 3 クラス増え 24 学級となり、教師も滝川小から 3 人転勤してくるほどの大きな変化を玉村小にもたらした。玉村小学校百八年史に当時の様子が記載(資料 7)されている。

資料 7 昭和 33 年当時の玉村小学校の様子

昭和三十三年、滝川村との町村合併が行われ、板井、宇貫、下郷から大勢の子どもが転入し三学級増となった。同校から三名の教師が転任して来たりして、必然的に教師間の交流が要求されたり、学校としての意思統一をせまられる機会が多くなった。板井地区は、合併に対し賛否が対立し、それだけに玉小教育に深い関心と厳しい目を向け、親たちの学校訪問や地区懇談会が回を重ねたのであった。

昭和三十三年は、また勤務評定強行の年であった。前年まで教員の勤務評定はしないと書いていた県教育委員会も、全国情勢や文部省からの強要によって実施にふみきったので、教職員組合の全面的な抵抗と対立した。十月二十八日には歴史的な教職員の日ストライキが行われた。この日まで連日連夜地区懇談会が続けられたが、どこでも非常に活発な論議が湧いたのを覚えている。当日先生たちは、感動的な初めての体験闘争を行ったが、子どもたちは、高学年の子が低学年の自習指導を担当し、整然と部落別一斉下校を行ったのである。

こうした政治的問題の多い時ほど、学校は平静にしかも職員の間を結束を強めようということ、前年度から始められた授業研究会は回を重ね、職員会は教育談話会の形式をとり、図画、作文の作品研究をすることが多かった。そういう中で期末通信(通信簿)の問題がとり上げられた。

昭和三十四年、玉小では期末通信廃止にふみきった。それまでの期末通信は二十八年に作成されたもので、点数をやめて、「よく努力した・努力した・ふつう」といったもので当時画期的なものであった。しかし子どもを具体的な姿で、把握するには評価や通信をもっと日常的にすべきだと考えた。学級通信・学校通信・授業参観、親との話し合いの機会を多くすることにより、総合的な期末通信はやめようということになった。父母のアンケートも八割近くがこれに賛成し、遂に通信簿は廃止された。

玉村小学校百八年史より写す

このようにいろいろな問題が起こる中、地区懇談会や学校訪問を重ねることによって、教師

資料 3 通信簿にかかわる子ども声

・去年の 1 年生 ———— こんな点ではうちによせない。A がもらえないんだね
 ・5、6 年の男子 ———— 家に見せなくて印だけを押し。1、2 学期 3 学期は破いて捨てた。4 年の時より悪いので
 ・女子 ———— A になることばかり考えていた。2 年になって A が無いのでおこった。
 ・兄弟が多い場合、A、B が少ないと劣等感を生む。

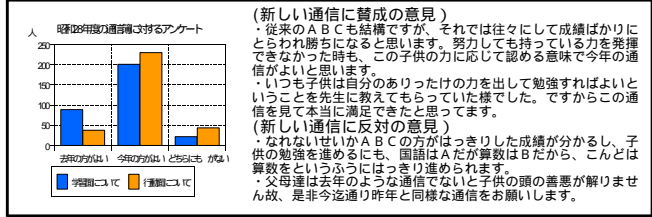
止めて
 ・懇談会等で学校の意見を言って、父兄に新しい教育の理解を求める。
 ・A B C を無くす。
 ・家庭から学校へはあまり利用されていない。

~~~~~ 以下省略 ~~~~~  
 昭和 28 年 5 月 19 日 職員会議録より写す

資料 4 昭和 28 年度の通信簿

| (学習面)     |       |       |       | (行動面)              |       |       |       |
|-----------|-------|-------|-------|--------------------|-------|-------|-------|
| 学 期       | 一 学 期 | 二 学 期 | 三 学 期 | 学 期                | 一 学 期 | 二 学 期 | 三 学 期 |
| 学 力 の 程 度 | よ     | ふ     | ち     | し                  | よ     | ふ     | ち     |
| 国 語       |       |       |       | よく見、よく考えて仕事をする     |       |       |       |
| 算 数       |       |       |       | みんなのために役に立つことをする   |       |       |       |
| 理 科       |       |       |       | 人のめいわくをかねない        |       |       |       |
| 道 徳       |       |       |       | 言葉づかい              |       |       |       |
| 書 法       |       |       |       | 構構しくふつうしてかく        |       |       |       |
| 図 画       |       |       |       | 面い字をていねいにかく        |       |       |       |
| 家 庭       |       |       |       | のうたをいかに使う          |       |       |       |
| 体 育       |       |       |       | 物を役立つように使う         |       |       |       |
|           |       |       |       | 忘れ物をしない            |       |       |       |
|           |       |       |       | 服(き)をばらしてあかがついていない |       |       |       |
|           |       |       |       | 髪をよく繕う             |       |       |       |
|           |       |       |       | 頭の毛は清潔である          |       |       |       |
|           |       |       |       | 手拭を用意している          |       |       |       |
|           |       |       |       | 鼻紙を用意している          |       |       |       |
|           |       |       |       | 手足の爪を適当に切っておく      |       |       |       |
|           |       |       |       | 靴の中をせいでんとんでおく      |       |       |       |
|           |       |       |       | 掃除の仕方              |       |       |       |

資料 5 アンケート結果



資料 6 通知票廃止への話し合い

昭和 30 年 7 月 6 日  
 ・努力と出来るを混合していないか  
 ・努力 その子として一生懸命やった活躍  
 ・圧力をのそくためだ  
 昭和 31 年 5 月 30 日  
 ・どのような形式に於いてもよく圧があるのではないか  
 ・努力の程度を ABC に変える付け方はカンであり不安定である  
 昭和 33 年 6 月 18 日  
 ・期末通信は止めたらどうか  
 理由...ふだんを注意してもらえわかる  
 ふだんの連絡を適切にしてあげば教師の自己まとめの形に過ぎない  
 父兄は意外に学校の様子を知っている  
 反論...年中やっつけねばならないが、今までの最小限  
 今ここにきて全く知らせないのはいかが  
 採決  
 1.....従来通り 5  
 2.....来年度は出さない 17  
 3.....ださない 1  
 職員会議録より一部写す

と保護者の理解が少しずつ深まったと考えられる。そして子どもたちが輝く目で、のびのび生活させたいという玉村小教育を推進するために、昭和 34 年に通信簿を廃止したのであろう。

### 3 玉村小学校で通信簿がなかった19年間

#### (1) 通信簿に代わるもの

では通信簿が無かった時代、どのようにして学校の様子を家庭に伝えていたのだろうか。

まず一つは授業参観日を増やすなど、親との話し合いの機会を多くしたことである。それ以前はどのくらいの頻度で授業参観をしていたのか不明であるが、廃止にともなって、月一回の割合で行われていた。またいつ学校に来て授業を参観してもよくなり、農作業の帰りに毎日寄るお年寄りがいたという話を聞いた。さらに昭和 37 年には父親参観を実施、以後ふだん着学級や輪読会など、教師と保護者が話し合える P T A の活動が活発化した。これにより直接意見交換をする機会が増え、教師と保護者の意思の疎通が図れたのだと思う。

二つ目は文集や学級通信が数多く発行されるようになったことである。B 先生の話では、「当時は通信簿はないほうがよいと思った。その子どもを、数字で決めつけてしまう面があるからである。子どものいいところを見て、個々の子どもを認めることが大切。よいところをその日のうちに通信に書いて、それを保護者に伝えればいいのだ。共感したことをその日のうちに書くことで、クラスにとっても親にとっても意味が出てくる。」という考えから、学級通信をほぼ毎日書いてクラスの様子を保護者に伝えていた。また資料編 1 の学級通信は、A 先生が通信簿が廃止された昭和 34 年に B 4 で 201 枚発行したものの一部である。学級通信を読むと、一人ひとりの作文を添削指導したりクラスの問題をみんなで考えたり、また算数や国語の授業の様子や子どもたちの日記が書かれていた。これだけ頻繁に発行していれば、クラスの様子が保護者によく伝わっていたであろう。創立百二十周年記念誌にも、学級通信や文集によって子どもの様子がよく分かったと親たちから喜ばれていた、と記載されている。

このような様々な教師の努力により、学校の様子を保護者に知らせていたのである。自分が考えていた以上に通信簿がなくても密接な関係を築いていたと思われる。

#### (2) 保護者の反応

では通信簿がなかった 19 年間の玉村小について、保護者はどのように見ていたのだろうか。

昭和 30 年代後半、玉村町は農業が盛んな地域であった。クラスの半数以上は、農家の子どもだったと聞いた。地域の方に当時の玉村小について伺ったところ、「教育についてはすべて学校に任せていた。教育に関心をもつ時代ではなかった気がする。」と話してくれた。通信簿が廃止になっても、大きな問題がなかったらしい。当時小学生だった人に話を聞いたところ、「中学に進学するまで、通知票があるということを知らなかった。中学に行って焦った。」と話してくれた。

では昭和 40 年代になると保護者の反応はどうだろうか。家庭の状況が違う 3 家庭に聞き取り調査した。以下は、その時伺った話の内容である。

滝川小では学級費が月々 200 円だったけど、玉村小は 20 円、これで大丈夫なのかと思った。でも滝川小で行っていた市販のテストを一度もやったことがなかったから...。また滝川小では 5 段階評価だったので、通知表がまったく無かったことには驚いた。家庭訪問でいろいろ質問したが、その時の先生には「いい人は親に褒められるが、しかられる人もいるから。成績は授業参観を見て判断してください」と言われた。いくら話をされても納得できなかった。さらに国語ではフランダースの犬を 1 年間学習したことは印象に残っている。学級通信はなかったと思う。地域の人達と、玉小の教育がおかしいという話をしていたと思う。妹のときにはどうしても玉小の教育に納得がいかなかったので、近所の教育委員さんに相談した。 J さんの談話

通信簿がなかったで、自由でのびのび小学校生活を送ることができた。国語と音楽は教科書を使わず、印刷した話を使った。特に国語も音楽もその文章の裏に隠されている意味を読み取ることを一生懸命やっていた気がする。通信簿がなかったことでは、あまり心配しなかった。なにか心配しても、旦那に学校に任せると言われる。また授業参観や子供の話で、満足していたのかもしれない。週末には買い物をしている先生に会うことも多く、よく話を聞いた。学級通信は買った印象がない。周りは昔からの農家はかりで、地域では玉村小の批判は聞かなかった。 K さん談話

昔から運動会では音楽がなく、マット運動や徒競走を行っていた。「どうして音楽がないの?」という声が保護者の中からあがっていた。また赤堀から転動してきた先生が担任になったとき、話を聞く態度ができていないし、学力が低くてがっかりしたと言われたことを覚えている。先生は玉小の子どもは率先して掃除をすると言っていたが、プールなどは校長先生が 1 人でやっていて、近所のお母さん方で手伝った。国語の授業はわら半紙の本を使い、また勉強をする雰囲気なかった。学級通信は 1 年生から 4 年生の先生は作っていなかった。いろいろなことが重なって、保護者や子供たちは先生に対し不満を持っていた。先生を呼んで、地区で話を聞いたこともあったほど。特に通信簿については、P T A 総会のときに役員の人たちが通信簿を出してくれと立ち上がったことがあった。 L さん談話



Jさんのお宅は、昭和 33 年に玉村に合併した板井地区に住んでいる方である。地域の事情から昭和 42 年、長女が 6 年生のときに滝川小から玉村小に転校することになった。Kさんのお宅は昭和 46 年に新居を建てるため、高崎から玉村に引っ越してきた。そのとき長女は 1 年生であり、玉村小に新入生として入学した。Lさんのお宅は、もともと玉村に住んでいる方であり、長女は昭和 48 年に玉村小に入学した。3 家庭の話だけでも、玉村小の教育に対する思いは、様々である。当然玉村小地区全体においても、同様に賛否両論の意見があったと思われる。

#### 4 通信簿復活の理由

昭和 53 年に通信簿が復活するが、その理由において、(1)の昭和 50 年頃の玉村小の教育と(2)の昭和 50 年頃の玉村小を取り巻く環境が深く関わっていると思われる。この二つについて以下で具体的に述べる。

##### (1) 昭和 50 年頃の玉村小の教育

玉村小では昭和 38 年になると、文学作品の読み取りに力を入れ、研究を始めた。そして昭和 47 年から昭和 51 年までの間に 6 回、国語教育公開研究会を開催し、日本全国から数千人とも言われるくらいたくさんの先生方が参加したという話を聞いた。

このように玉村小では、子ども一人ひとりが分かる授業を、形を変えながらも戦前からこの時期までずっと展開しようと努力していた。そのため教師は、指導力を磨き、子どもの力を伸ばすのにふさわしい授業内容を考えなければならない。当時の職員の様子を C 先生から「子どもが生き生きと生活することが大切で、子どもの目を通知票で曇らせなくてもよい。5 にするのが教師の役目である。そのためには自分たちの授業の腕を上げる必要がある。そのために授業研究を夜遅くまで行い、学校全体が熱く燃えていた。」と聞いた。当時の指導案を見ると、細かく指導内容が検討されていて、熱心に長時間かけて授業研究をしていたことが容易に分かる。

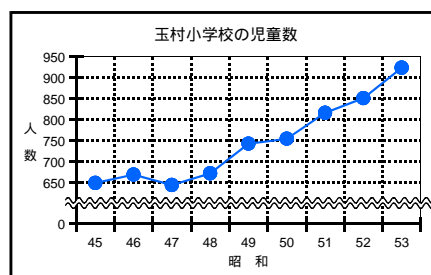
しかし、この熱心な授業研究が学級通信を作る時間を奪ってしまったのかもしれない。このころになると学級通信を書いている教師が非常に少なくなっていた。私が伺った 3 家庭の話の中にも出てきたが、他の多くの保護者や当時の子どもたちに聞いても学級通信をもらった記憶がないと話していた。通信簿廃止時に、保護者に子どもの様子を伝えるために頻繁に発行していた学級通信が、昭和 40 年代になると、ほとんど発行されていなかったと思われる。

##### (2) 昭和 50 年頃の玉村小を取り巻く状況

昭和 40 年代後半になると、大きく日本や群馬県の教育を取り巻く環境が変わってきた。戦争の傷跡はすっかり消え、日本は高度経済成長を遂げる。それにともない高校進学率も 95 % を超えるなど学歴社会が進み、受験戦争が激化し、学校生活の中で成績に目を向ける保護者が増えた。また群馬県も全国一斉学力調査の結果を踏まえて、昭和 46 年度から 5 年間、第一次学力向上対策を実施し、知識を中心とした学力の向上を目標に取り組んだ。昭和 52 年度からは第二次学力向上対策を実施し、昭和 53 年度末までに群馬県全地区が指定地区として取り組んだ。そんな情勢の中、玉村町も昭和 53 年度に教育研究所を開設するなど、教育力の向上を目指した。

また昭和 48 年頃から玉村町の人口が急増している。これは高崎や前橋の人々が玉村に家を新築して移り住んできたからである。特にこのころ板井地区(玉村小学校区)は、たくさんの家が建てられるようになった。それにともない、玉村小学校の児童数も資料 8 のグラフの示す通り、急激に増加してきている。他地域から転入してきた

資料 8 玉村小学校の児童数



ほとんどの家庭が、通信簿がなく、授業の仕方も大きく違ったので戸惑ったに違いない。しかも学級通信もほとんどなく、学校の様子が分からないとなると、学歴社会が進行していた当時、保護者が玉村小の教育に疑問を感じ、不満をもつのは当然であろう。昭和 51 年当時の校長先生は、「多くの保護者から『なぜ、通信簿を出してくれないのか』という苦情やお願いの意見がたくさんきた」と話してくれた。さらに保護者が会議の中で通信簿を出してほしいと強く要求する事件があったことを地域の人から聞くことができた（資料 9）。

#### 資料9 保護者からの要望

昭和 51 年度の P T A 総会において、学年委員さんの中から通信簿を出してほしいという意見が出された。その発言の後、堰を切ったように同様の意見が出され、特に父親が真剣に発言する様子が印象に残っています。「通信簿を出さないとは職務怠慢ではないのか」「なぜ通信簿を出さないのか」「中学に行ってこんな成績だったのかという声を聞く」「受験のときに困る」「他の地域もなければいいが、他の学校はある」「自分の子が何をやっているのか、成績はどうなのかが分からない」などの意見が出されました。この総会では、学校側からはっきりした返事はもらえず終わりました。当時はとにかくいろいろな面で学校への不満が強くありました。また子どもたちの生活も不安定になり、この時期に大きな問題が起こったことも、学校への不信につながったのかもしれない。今考えると、親の学校への不満が、子どもの心を荒れさせたのかもしれない。

このように昭和 51 年、多くの保護者が通信簿を出すよう、学校側にせまったのである。さらに昭和 51 年度の職員会議録を見ると、資料 10 のように記載されていた。

#### 資料10 通信簿復活に向けての職員会議

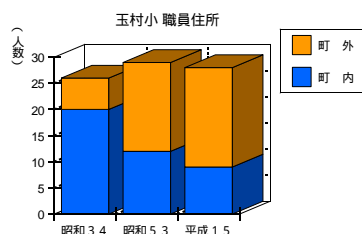
|                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                            |                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>・昭和 51 年 5 月 26 日<br/>         1. 通知票に変わるもの<br/>         2. 地域でかたまって家庭訪問をうける<br/>         3. 1 年生の学級編成<br/>         4. 学校の様子が知りたい。<br/>         5. 玉小の親の心配<br/>         6. 冬<br/>         7. 学習内容を知りたい</p> | <p>・昭和 51 年 10 月 25 日<br/>         教育委員との話し合い<br/>         = 途中省略 =<br/>         通信簿を出す方向で実施します……議会で答弁</p> | <p>・昭和 51 年 11 月 9 日<br/>         1 通知簿がないそうだが、<br/>         2 アンケート調査<br/>         3 たくさん要望がある<br/>         4 学校長の考え<br/>         5 教職員の移動<br/>         = 省略 =</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

職員会議録より写す

内容から推測すると、保護者だけではなく、教育委員会や町議会の中でも玉小の通信簿について意見が出されていた形跡があり、町内で大きな問題になっていたことが想像できる。

さらにこの時期、職員の構成が大きく変わった。昭和 50 年までは、玉村在住の職員がほとんどであった。資料 11 のグラフを見ると昭和 34 年当時の玉村小の教師のうち、玉村に住んでいた教師の割合は、実に 26 人中、20 名(77 %)である。この結果を見ると、K さんがお話をしてくれた通り、週末や町内の行事などで、先生と出会う確率が現在よりも高かったであろう。しかし昭和 50 年頃から、佐波郡以外で勤務していたり、住んでいたりする教師が、玉村小に多く転勤してくるようになった。このことにより、教師の中にも玉村小の教育や通信簿がないことに疑問をもつ人がいたと思われる。

資料11 玉村町在住の職員割合



#### (3) 通信簿の復活

以上(1)(2)で述べてきたように、玉村小の職員が目指していた教育の方向と保護者や地域が求める教育の方向のずれが大きくなってきたのが昭和 50 年代である。職員会議で通信簿を出すか出さないかを話し合っている中、他地域から転任してきた先生方の中で、保護者や地域の声を受けて個人的に通信簿を作る先生が現れた。当時の校長先生に聞いた話では、昭和 51 年度に手作りの通信簿を発行した先生がおり、昭和 52 年度にはさらに多くの先生方が通信簿を家庭に手渡している。実際に確認できたのは昭和 52 年度のもので、相対評価なのか、到達度評価なのかは不明であるが、この先生は『特によい・良い・ふつう・もうひといき・困難』の 5 段階で各教科を評

#### 資料12 通信簿作製へ向けての提案

- 評価
1. 学期末にひとりひとりのこどもの学習、生活の様子を父兄に知らせる。
  2. その評価法は到達度評価とする。
  3. 内容は学年で協議し、共通な物を生み出す。
  4. 印刷はすべて学校予算で行う。
  5. 個人カードは継続して使用する。
- 昭和 53 年 4 月職員会議資料から

価している。行動面については言葉で記入されていた。また出欠席や担任の名前もなく、非常にシンプルなものである。

そして昭和 53 年、いよいよ学校全体で通信簿を出す取組を始める。4月の職員会議で資料 12（全文は資料編 3）のような提案がなされた。それを受けて、各学年で検討し、いよいよ 1 学期末に通信簿が手渡された。しかし校長から保護者への通知を読むと（資料編 2）、全校で同じ日に出すことはできず、学年やクラスによって渡す日が違っていた。19 年間通信簿がなかったのだから、当然、通信簿を発行するにあたって、職員の中で大きな混乱があったことが推測できる。

資料 13 は昭和 53 年度に発行された 5 年生の通信簿である。名称は連絡票で、学習面は 3 段階の到達度によって評価していた。行動面は文章で記入し、本人が書いた自己評価カードも上から貼られている。これ以後、玉村小では通信簿が発行されるようになった。

資料13 昭和53年度 通知票

| 昭和 53 年度 5 年生 連絡票 |                        | 1 学期    |         |
|-------------------|------------------------|---------|---------|
| ( 学習面 )           |                        |         |         |
| 教科                | 評価の観点                  | 学習のようす  |         |
|                   |                        | 大が<br>ん | ひ<br>ょう |
| 国語                | ・話の要点を聞きとる             |         |         |
|                   | ・すし通をたてて話す             |         |         |
|                   | ・文章を正しく読む(音読)          |         |         |
|                   | ・文章の内容の理解(読解)          |         |         |
|                   | ・ならった漢字の読み書き           |         |         |
| 社会                | ・授業による書写               |         |         |
|                   | ・要旨のはっきりした文章を書く        |         |         |
|                   | ・日本の国土、地形、気候の特色        |         |         |
|                   | ・日本の農業生産               |         |         |
|                   | ・資料(地図、表、グラフ、参考書など)の活用 |         |         |
| 算数                | ・十進法のしくみの理解            |         |         |
|                   | ・小数のかけ算、わり算            |         |         |
|                   | ・三角形、四角形、作図            |         |         |
| 理科                | ・種子のつくり、発芽、成長の条件       |         |         |
|                   | ・人や魚の体のしくみとほたらき        |         |         |
|                   | ・酸素と二酸化炭素              |         |         |
|                   | ・環境を正しくとって美しい表現で書く     |         |         |

### 研究のまとめと今後の課題

戦前に行われていた合科教育が、戦後になっても玉村小学校の教育に大きな影響を与えていることを感じた。そのように感じたのは、合科教育時と同様、戦後の玉村小学校においても教科書などに頼らず、子どもに力を付けるにはどう指導したらよいか、どんな教材を使えばよいか、また独自に教材開発をしたり教育課程を考えたりして、学習を行っていたからだ。研究を進めていくほどに、いつも教育を子ども主体に考え、教師の指導技術を高める努力を怠らず、努力を重ねていた教師の姿を感じた。しかし、いくら子どものために頑張ったからといって、いつも保護者や地域に受け入れられるとは限らないことを本研究を通して知ることができた。特に通知票を廃止した経緯では、私が調べたこと以上に当時の先生方の深い考えと行動力によって行われたものであろう。決して教師が楽をしようとしたものではなく、教育の本質を考えた上での決断であったと思う。それが時代の流れの中で、地域や保護者の教育観の変化から受け入れてもらえなくなったのである。特に人口が急増するなど、地域の様子が大きく変化するとき、教育に対する価値観が一変してしまう可能性があるように感じた。

通知表とはどういうものなのか、教師や保護者の話を聞く中でじっくり考えることができた。通知表は、教師、保護者、子どもそれぞれの立場によって思いや役割が異なり、すべてを満足させる形式とはどういうものであるのか、今後研究していきたい。

### 参考資料

- ・『玉村小学校百八年史』『玉村小学校百二十周年記念誌』 玉村町立玉村小学校
- ・『労働文化 10, 11 月合併号』 群馬県教職員組合機関
- ・『教育研究集会研究録』 佐波伊勢崎研究集会
- ・『玉村町史 通史編』 玉村町